

QRDM の HSM 領域の利用について

九州大学研究データ管理用ストレージシステム QRDM に新たに 2PB の長期保存用の領域と階層型ストレージ管理(HSM: Hierarchical Storage Management)機能が追加された。追加された領域を HSM 領域と呼ぶ。

1. HSM 領域でできること

HSM 領域は、以下の目的で利用することができる。

- (a) 退職後における根拠データの保存
退職等で研究データを引き継ぐ者がいない場合に、根拠データの「10 年保存」環境として利用することができる。この場合、管理は大学に移譲される。
- (b) 大規模またはセンシティブな根拠データの保存
個人で保存環境を整備することが困難な大規模データや、個人情報などを含むセンシティブなデータを保存する環境として利用することができる。

2. HSM 領域の利用

QRDM のアカウントを有する本学の教員は、HSM 領域を利用することができる。

HSM 領域の利用を希望する者は、申請フォームにより、研究データ管理支援部門(RDS 部門)に利用申請を行う。RDS 部門は、申請内容(利用目的、使用予定容量等)、および HSM 領域の空き領域を考慮し、利用の可否を判断する。

前項の(a)の目的でデータを保存する場合は、データの開示要求に RDS 部門等が対応できるよう、データと研究成果の論文等との対応が取れるような「論文との対応関係記述表」提出を求める。

なお、既に前項の(b)の目的で HSM 領域にデータを保存している場合でも、(a)の目的でのデータ保存を希望する場合は改めて利用申請を行う必要がある。

3. HSM 領域の利用法

利用が許可されると、そのアカウントの QRDM のトップに、

(a)の場合は FK_xxx.yyy

(b)の場合は hsm_xxx.yyy

(xxx は全学基本メールの@の左の文字列、yyy は QRDM の ID)

というフォルダーが見えるようになる。このフォルダーに保存したいファイルやフォルダーをコピーすることで、HSM 領域に保存される。

なお、HSM 領域にコピーされたファイルやフォルダーの名前の変更や削除、ファイルの編集はできないので注意すること。

補足

(1) 根拠データの10年保存について

論文等の研究成果発表のもととなった根拠データは、発表後10年間保存することが「研究データの保存等に関するガイドライン」で義務付けられている。保存のための環境は基本的には教員自身が準備するものであるが、教員が退職後もその環境を維持するのは困難であることが予想される。そこで、成果発表後10年を経過していないデジタルの根拠データを、教員からの申請に基づいて、RDS 部門で保存・管理する。ただし、退職後も学内に共著者の教員がいる場合は、共著者に根拠データを移管して保存してもらうことを基本とする。

(2) HSM 領域の構成

HSM 領域は、0.5PB のホットストレージと 2PB のコールドストレージ(磁気テープ)を階層化したものである。HSM 領域へのコピーは、まず、ホットストレージ上へのコピーが行われ、一定時間経過後に、コールドストレージに移される。すなわち、データの実体は磁気テープ上に存在することになるため、アクセスは遅い。頻繁にアクセスがある現用のデータの保存には不向きである。HSM 領域にコピーされたデータは磁気テープへのバックアップも行われる(つまり、磁気テープには2重にコピーされる)ため、何らかのトラブルでデータを失うリスクは低い。